和光大学現代人間学部紀要　第9号（2016年3月）

日本における心理学的恋愛研究の動向と展望

高坂康雅 *Kosaka Yasumasa*

1 ── 問題と目的
2 ── 方法
3 ── 結果
4 ── 考察

【要旨】本研究の目的は、2004 年 4 月から 2013 年 3 月までに刊行された恋愛に関する学会誌論文を概観することで、現在の日本における心理学的恋愛研究の動向と課題を明らかにすることである。検討対象となった 31 本すべてが質問紙法を採用しており、調査手法の偏りが明確になった。また 31 本のうち 28 本は、立脇・松井・比嘉（2005）が示した恋愛研究の 4 つの方向に該当していることから、方向によって進捗状況は異なるが、それぞれが着実に知見を積み重ねていることも示された。そのうえで、調査手法や調査対象者の拡充、無批判に欧米の理論や知見を取り入れ、日本での適用を確認するだけではなく、日本特有の恋愛現象・行動に着目した研究を行うこと、セクシャルマイノリティの認知・理解が広がるなか、恋人の定義を明確にすること、などの課題や展望が指摘された。

1 ── 問題と目的

青年期に入ると、人は異性や異性の身体に興味をもち、異性と親密な関係（恋愛関係）になりたいと望むようになり、実際に異性と恋愛関係を構築する青年も少なくない。恋愛は青年に限らず、どの世代でも強い関心を抱かせるものであり、恋愛に対して高い価値をおく日本では、なおさらである。

このような世間の高い関心のもと、恋愛に関する心理学的実証研究は、欧米では 1970 年代から始まり、日本においても 1980 年代以降、徐々にその数を増やしている。松井（1990）は、1990 年までの日本における恋愛研究のレビューを行い、日本の恋愛研究には、「恋愛の発達」、「恋愛中の意識や行動」、「性行動の発達」のような青年心理学の分野における研究と、「恋愛の進行と崩壊」、「恋愛感情と意識」、「恋愛に対する態度や認知」、「異性選択と交換理論」などの社会心理学の分野における研究に分けられ、青年心理学における研究と社会心理学における研究は、互いに知見を共有し合っていないという問題点も指摘している。また、立脇・松井・比嘉（2005）は、1985 年 4 月から 2004 年 3 月の間に 6 つの学会誌

と 5 つの学会での大会で発表された研究を対象に、恋愛研究の動向を検討している。その結果、(1) 1995 年以降、恋愛研究は、①コミュニケーションなど特定の内容に関して詳細に検討する方向（内容の細分化）、②交際中に限定せず、恋愛の前後の現象を扱う方向（対象の時間的拡大）、③対処行動が必要となる恋愛の負の側面を扱う方向（恋愛の捉え方の多様化）、④恋人関係を独立して捉えず、他の人間関係の中に位置づける方向（恋愛関係の相対的理解）、という 4 つの方向で発展した、(2) 青年心理学分野における研究発表はほとんどなく、恋愛研究は社会心理学分野を中心に発展してきた、(3) 調査方法の多くが質問紙法であり、対象者も大半は大学生であった、などの知見を示している。

立脇ら（2005）が示したように、調査方法や調査対象者に偏りはあるものの、日本の恋愛研究は、着実に知見を積み重ね、また、対象とする現象を広げてきている。一方、2000 年代に入り、日本の恋愛に関する事情は大きく変化している。例えば、1990 年代に比べ、恋人がいる者の割合や交際経験がある者の割合が低下していることが示されている（日本性教育協会, 2013）。また、草食男子（深澤, 2007）に代表されるように、恋愛に積極的ではない若者や恋人を求めない若者が注目されるようになってきている。さらに、セクシャルマイノリティ（LGBT）が広く認知されるようになり、同性間での恋愛関係も徐々にではあるが受容されるようになってきている。スマートフォンのような情報ツールが青年に広く普及したことにより、交際の仕方がこれまでとは異なっている可能性も考えられる。

このような恋愛に関する時代的・社会的変化がみられた 2000 年代の恋愛研究の動向については、立脇・松井（2014）がレビューをしている。立脇・松井（2014）では、2000 年代に入り、恋愛に関する研究発表数は増加しており、恋愛観や恋愛イメージに関する研究、告白や失恋（恋愛関係崩壊）に関する研究、恋愛関係に対する第三者からの影響に関する研究、恋愛関係とアイデンティティとの関連に関する研究など、恋愛研究の幅の広がりも指摘している。また、レビューを通して、①恋愛における現象記述と一般理論の乖離がみられる、②日本で蓄積されてきた研究成果が、十分に普及していない、という課題を示し、特に、日本の恋愛研究は、具体的な行動記述と抽象的な理論の間をつなぐ中範囲の理論が育っていないと指摘している。

松井（1990）、立脇ら（2005）、立脇・松井（2014）により、日本における恋愛研究の動向はある程度把握することができる。一方、立脇ら（2005）では、論文収集の時点で、検索する学会を社会心理学や発達心理学などの分野に限定しているが、ここで対象とならなかった分野（例えば、臨床心理学）の学会誌にも恋愛研究が掲載されている可能性がある。また、立脇・松井（2014）では、立脇ら（2005）では収集の対象としていなかった紀要論文を収集対象としており、家族社会学や教育学など心理学以外の分野の研究も収集の対象としているため、心理学における研究動向を捉えているとは言い難い。さらに、松井（1990）が示した恋愛研究の分類や、立脇ら（2005）が示した恋愛研究の 4 つの方向などと対応付けて検討していないため、松井（1990）や立脇ら（2005）と比較した 2000 年代の恋愛研究の特徴などを見出しにくい。

そこで、本研究では、日本における心理学系の学会誌論文に限定して恋愛研究のレビューを行い、立脇ら（2005）が示した恋愛研究の 4 つの方向に対応付けて検討することにより、現代の日本における恋愛研究の動向や展望、課題を明確にすることを目的とする。

2 ── 方法

検討対象・論文収集の基準

2014 年 5 月から 6 月に、日本心理学諸学会連合に加盟している 50 学会（当時）より 2004 年 4 月から 2013 年 3 月の間に刊行された学会誌を対象に、恋愛に関する研究の検索を行った。

本研究では、立脇ら（2005）を参考に、(1) タイトルまたはキーワードに「恋愛」、「異性関係」、「恋人」のいずれかが含まれている論文、(2) 初対面の異性の外見を扱った論文のうち、「その異性との交際可能性」を測定している論文、(3) 性行動や性意識に関する論文のうち、「恋人」の有無による行動や意識の違いを検討した論文や、恋愛行動、恋愛意識についても測定している論文、という 3 つの基準のいずれかを満たす学会誌論文を収集した。

なお、意見論文やリプライ論文、展望論文、記録など、オリジナルの論文（原著論文、資料論文、ショートレポートなど）以外は収集対象とはしなかった。

その結果、社会心理学研究（日本社会心理学会）9 本、発達心理学研究（日本発達心理学会）5 本、心理学研究（日本心理学会）4 本、実験社会心理学研究（日本グループ・ダイナミックス学会）3 本、パーソナリティ研究（日本パーソナリティ心理学会）3 本、青年心理学研究（日本青年心理学会）3 本、教育心理学研究（日本教育心理学会）1 本、学生相談研究（日本学生相談学会）1 本、応用心理学研究（日本応用心理学会）1 本、心理臨床学研究（日本心理臨床学会）1 本、合計 31 本を検討対象とした。

3 ── 結果

調査手法と調査対象者

まず、立脇ら（2005）が恋愛研究において調査手法や調査対象者が偏っていると指摘していることから、検討対象となった論文 31 本の調査手法と調査対象者について、クロス集計表を作成した（表 1）。その結果、31 本すべてが質問紙法であり、21 本（67.7%）が大学生を対象とした単発の調査であった。

表1　調査手法と調査対象者のクロス集計表

	大学生	大学生～社会人
質問紙（通常）	21（67.7%）	1（3.2%）
質問紙（ペア調査）	6（19.4%）	1（3.2%）
質問紙（パネル調査）	2（6.5%）	0（0.0%）

注．大学生には、4年制大学生、短期大学生、専門学校生が含まれる。社会人には、正規・非正規雇用者、フリーター、大学生の親などが含まれる。
注．複数回調査が行われている論文については、予備調査と本調査という構成であれば本調査について、研究1、研究2という構成であれば後者の調査をもとにカウントした。

研究内容

立脇ら（2005）は、恋愛研究をレビューし、4つの方向を提示している。そこで、検討対象となった論文31本について、立脇ら（2005）が示した4つの方向をもとに分類を行ったところ、表2のように、28本は4つの方向のいずれかに分類されたが、3本は⑤「その他」として分類された。

以下、各方向に該当する論文の概要を紹介する。

①特定の内容に関して詳細に検討する方向（内容の細分化）　ここには、恋愛関係における特定の現象や行動、感情などに焦点化して検討を行っている論文11本が分類された。内訳は、恋愛関係の影響に関する研究が3本、交際中の意識・感情に関する研究が2本、異性に対する自己呈示に関する研究が2本、その他が4本であった。

髙坂（2009, 2010a, 2013a）は、“恋愛関係をもつことによって生じたと青年が認知している心理的・実生活的変化”を「恋愛関係の影響」と定義し、継続的な研究を行っている。髙坂（2009）では、恋愛関係の影響は、自己拡大、充足的気分、拘束感（髙坂（2010a）以降は他者交流の制限）、関係不安、経済的負担、生活習慣の乱れ（髙坂（2010a）以降は時間的制約）、他者評価の上昇、という7つに分類され、男子は交際期間が長くなるにつれて関係不安は低下するが、女子は高い水準のままであることや、特に女子において、恋愛関係の影響と関係満足度との間に関連がみられることを明らかにしている。髙坂（2010a）では、恋愛関係の影響を規定する要因として、自身のアイデンティティと恋人の推測されたアイデンティティを取り上げ、それらを組み合わせて検討している。その結果、自己拡大や充足的気分は恋人を達成型やフォークロージャー型と推測している者の方が高く、他者交流の制限は恋人を拡散型やモラトリアム型であると推測している者の方が高く、また、回答者自身がモラトリアム型であると時間的制約を強く感じることが明らかにされている。さらに、

表2　対象論文の分類結果

方向	カテゴリー	論文
内容の細分化(11)	恋愛関係の影響(3)	髙坂(2009), 髙坂(2010a), 髙坂(2013a)
	交際中の意識・感情(2)	金政(2006), 浅野(2011a)
	自己呈示(2)	谷口・大坊(2005), 谷口・大坊(2008)
	その他(4)	清水・大坊(2007), 清水・大坊(2008), 岡島(2010), 浅野(2011b)
対象の時間的拡大(4)	恋人選択(1)	阪井(2007)
	関係崩壊・失恋(3)	加藤(2005), 山下・坂田(2008), 浅野・堀毛・大坊(2010)
恋愛の捉え方の多様化(2)		宮村(2005), 相羽(2011)
恋愛関係の相対的理解(11)	他の対人関係との比較(10)	立脇(2005), 多川・吉田(2006), 松本(2007), 相馬・浦(2007), 立脇(2007), 金政(2009), 下田(2009), 髙坂(2010b), 浅野・吉田(2011), 金政(2012)
	他の対人関係からの影響(1)	山内・伊藤(2008)
その他(3)	感情生起(1)	榊原(2012)
	恋人を欲しいと思わない青年(2)	髙坂(2011), 髙坂(2013b)

注．方向・カテゴリーの( )内は該当論文数

髙坂（2013a）では、恋愛関係の影響とアイデンティティとの因果関係について、3時点でのパネル調査を実施し、検討している。その結果、アイデンティティに対して関係不安のみ交差遅れ効果がみられている。関係不安は女子において関係満足度と負の相関を示しているが（髙坂, 2009）、髙坂（2013a）において、関係不安を感じることによって自身のアイデンティティが補強されることが明らかにされ、関係不安は、恋愛関係に対してはネガティブな影響をもつが、青年個人にとってはポジティブな影響をもつ両面性が示されている。

交際中の意識・感情に関する研究として、金政（2006）は、愛着スタイルが恋愛関係の排他性に及ぼす影響を検討している。その結果、関係不安は高いほど排他感や排他感表出性を高め、親密性回避は高いほど排他感や排他感表出性を低めることや、親密性回避は恋愛関係への第三者の介入時の対処行動として「別れ行動」、「無視行動」のような破壊的行動を促進することなどが明らかにされている。また、浅野（2011a）は、恋愛関係における関係効力性が感情体験に及ぼす影響を、カップルデータによるマルチレベル構造方程式モデリングを用いて検討し、関係効力性は恋愛関係にある双方のポジティブ感情経験の頻度を高める一方、ネガティブ感情経験の頻度には影響しないことが明らかにされている。

自己呈示に関する研究として、谷口・大坊（2005）は、異性との親密さと自己呈示動機との関連を検討している。自己呈示の側面は「外見的魅力」、「有能さ」、「社会的望ましさ」、「個人的親しみやすさ」の4側面に分けられ、想定した異性が恋人であっても、異性友人であっても、関係の重要性や恋愛感情が「社会的望ましさ」や「個人的親しみやすさ」に関する自己呈示と正の偏相関を示すことが明らかにされている。一方で、「外見的魅力」や「有能さ」は恋人関係では関係の重要性や恋愛感情とは関連をしなかったが、異性友人関係ではそれらと正の偏相関を示しており、恋人関係と異性友人関係との差異が明らかにされている。また、谷口・大坊（2008）は、自己認知、恋人から望む評価、恋人からの評価の推測の相互関係を領域の重要性を含めて検討することにより、恋人関係における自己呈示が自己確証的か自己高揚的かを検証している。その結果、恋人からは自己認知よりも高い評価を求め、また高い評価を得ていると推測されていることなどが示され、恋人関係では自己高揚動機と自己確証動機をともに満たすことができると示唆されている。

その他の研究として、清水・大坊（2007）は、恋愛関係における相互作用構造と関係安定性の関連について、カップルデータによるペアワイズ相関分析を用いて検討している。その結果、カップルレベルでは影響多様性が、個人レベルでは影響の強度が関係安定性と関連を示しており、関係安定性への影響がカップルレベルと個人レベルでは異なることを示している。また清水・大坊（2008）は、恋愛関係の良好性に影響を及ぼす要因を、カップルデータにより多段共分散構造分析を用いて検討し、カップルレベルでは関係の強度と多様性が、個人レベルでは関係の強度が良好性に正の影響を及ぼしていることを明らかにしている。岡島（2010）は青年のアタッチメントスタイルの変化に対する恋人の応答性の影響について、2時点のパネル調査を実施し、検討している。その結果、恋人の応答性の認知と応答の一貫性の認知がアタッチメントスタイルの変化に影響を及ぼしていることが示唆

されている。浅野（2011b）は、恋愛関係と精神的健康との関連について、カップルデータを用いて検討している。行為者―パートナー相互依存性モデルを用いて分析を行ったところ、男女ともに知覚されたサポートや親密性が自身の首尾一貫感覚を高め、その結果、精神的健康を高めていることが明らかにされている。また、女性の知覚されたサポートは男性の首尾一貫感覚を促進する一方、女性の親密性は男性の首尾一貫感覚を抑制し、さらに男性から女性への影響はみられないことが示されている。

②恋愛の前後の現象を扱う方向（対象の時間的拡大）　ここには、恋愛関係構築前の恋人選択に関する研究 1 本と、関係崩壊・失恋とその後のコーピングなどに関する研究 3 本が分類された。

恋人選択に関する研究として、阪井（2007）は、セクシズムと恋人選択との関連について検討している。阪井（2007）は、セクシズムを異性に対する好意的セクシズムと敵意的セクシズムの両側面から捉え、男性も女性も敵意的セクシズムは、恋人選択において、財力、外見的魅力、内面性それぞれの重要性を高め、また女性では好意的セクシズムは、外見的魅力と内面性の重要度を高めていることが明らかにしている。

関係崩壊・失恋に関する研究として、加藤（2005）は、失恋コーピングについて回避、拒絶、未練の 3 高次因子を抽出し、拒絶や未練は、失恋後のストレス反応を高め、回復期間も長くする一方、回避は回復期間を短くすることを明らかにしている。山下・坂田（2008）は、恋愛関係崩壊からの立ち直りに及ぼすソーシャル・サポートの影響について検討し、情緒的サポートを様々な関係から得られる者の方が、友人など特定の関係からしか情緒的サポートを得られない者よりも、関係崩壊からの立ち直り状態が良好であることが示されている。浅野・堀毛・大坊（2010）は、失恋コーピング（加藤, 2005）が失恋相手からの心理的離脱を介して、首尾一貫感覚に及ぼす影響を検討している。その結果、未練型コーピングは心理的離脱を介して首尾一貫感覚を低めるのに対し、回避型コーピングは心理的離脱を介して首尾一貫感覚を高めること、また、拒絶型コーピングは心理的離脱を介さずに直接的に首尾一貫感覚を低めることなどを明らかにしている。

③恋愛の負の側面を扱う方向（恋愛の捉え方の多様化）　ここには、2 本の論文が分類された。

宮村（2005）は、大学生のストーカー被害に関する実態調査を行い、男子学生では 10.8%が、女子学生では 44.1%がストーカー被害を経験していること、男子学生は「軽いつきあいの友人」や「知り合い」に一方的に恋愛感情をもたれストーカー行為に発展する場合が多いのに対し、女子学生は「見ず知らず」の者からストーカー行為を受ける場合と、「元交際相手」からストーカー行為を受ける場合が多いこと、女子学生において、恋愛関係解消の際に感情の変化を伝えずにすべての接触を避けた場合にストーカー被害を受けやすいこと、などが明らかにされている。相羽（2011）は、恋愛における問題状況として、交際前

には「自分からのアプローチ」と「恋愛対象外の相手からのアプローチ」の２つがあり、交際中には「相手への支援のできなさ」、「関係に対する不安感」、「相手の過干渉」、「自分の過失に対する相手の否定的反応」の４つがあり、別れ･交際後には「別れたくない相手との別れ」と「別れの切り出し」の２つがあることを明らかにしている。また、これらの問題状況をどの程度感じるかには、性別や交際経験の有無、異性不安、恋愛有能感が関連していることも示されている。

④他の人間関係の中に位置づける方向（恋愛関係の相対的理解）　ここには、恋愛関係を友人関係や親子関係など他の対人関係と比較している研究10本と、他の対人関係が恋愛関係に及ぼす影響を検討している研究１本が分類された。

恋愛関係と他の対人関係を比較している研究として、立脇（2005）は、異性交際中の否定的出来事を親和不満出来事と攻撃・拒否出来事に、否定的感情を親和不満感情と攻撃・拒否感情に分け、恋人、片思いの相手、異性友人との関係の中で、それらがどの程度生起するかを比較している。その結果、攻撃・拒否出来事や攻撃・拒否感情は恋人関係の方が片思いの相手との関係や異性友人関係よりも生起しており、親和不満出来事は片思いの相手との関係の方が恋人関係よりも、親和不満感情は恋人や片思いの相手との関係の方が異性友人関係よりも生起していることが示されている。また立脇（2007）は異性交際中の感情を情熱感情、親和不満感情、尊敬・信頼感情、攻撃・拒否感情に分類し、情熱感情は男女ともに異性友人関係よりも恋人関係や片思いの相手との関係で生じ、親和不満感情は女性においてのみ、片思いの相手との関係、恋人関係、異性友人関係の順で生じており、尊敬･信頼感情は恋人関係の方が片思いの相手との関係や異性友人関係よりも生じ、攻撃･拒否感情は恋人関係の方が異性友人関係よりも生じていることを明らかにしている。また、これらの感情は対象とする異性との関係の違いにより、関係評価（関係満足度、関係継続意志）への影響が異なることも示されている。

多川・吉田（2006）は、恋愛関係、片思いの関係、異性友人関係について、４つの日常的コミュニケーションが愛情（金政・大坊（2001）の日本語版愛情の三角尺度の「親密性」、「情熱」、「コミットメント」）に及ぼす影響を検討している。その結果、いずれの関係においても、「日常的な報告」が親密性を高め、「独特な言葉使い」が親密性、情熱、コミットメントのすべてを高め、「相手の対応の認知」も片思い群の情熱を除いたすべてを高めることが明らかにされている。松本（2007）は自己愛傾向と友人・恋人・親に対する肯定的態度との関連について検討している。その結果、自己愛傾向の高低にかかわらず、「愛情」は友人、恋人、親との間で差異は見られず、「同調」は親よりも恋人の方が高く、「接近」は友人や親よりも恋人の方が高いことが示されている。また、自己愛傾向が低い群では、親よりも友人の方が「同調」も「接近」も高いことが明らかにされている。相馬・浦（2007）は、関係内・外からのサポート取得に対する抵抗感について、恋愛関係（一般的信頼感は高い）、一般的信頼感の高い友人関係、一般的信頼感の低い友人関係という三者間での比較を行ってい

る。その結果、関係内部でのサポート取得の抵抗感は、一般的信頼感の高さによって規定されるが、排他的な関係外部からのサポート取得に対する抵抗感は、恋愛関係か否かという関係性の違いによって規定されることが明らかにされている。

金政（2009）は、恋愛関係にある大学生のカップルデータと、大学生とその母親のペアデータを用いて、これらの愛着関係において、関係不安が自身及び相手の関係内におけるネガティブな感情経験を媒介して、自身及び相手の関係評価を下げるという“悲しき予言の自己成就”が共通して見られることを明らかにしている。また金政（2012）は、恋愛関係にある大学生のカップルデータと中年期夫婦のペアデータを用いて、これらの関係における相互支援が関係満足度や精神的健康に及ぼす影響について検討している。その結果、大学生カップルでは、本人の支援期待が直接的に相手からの支援の認知に影響を及ぼしているのに対し、中年期夫婦では、本人の支援期待から相手からの支援認知への直接的な影響だけでなく、相手の支援遂行度を媒介として相手からの支援認知に影響を及ぼしていること、また、大学生カップルや中年期夫婦の妻において、相手からの支援認知が関係満足度を高め、それにより精神的健康を高めることなどが明らかにされている。このように金政は、愛着関係である母子関係、恋愛関係、夫婦関係の共通性と差異について精力的に検討を行っている。

下田（2009）は、拡張自己評価維持モデル（Extended Self-Evaluation Maintenance Model; 拡張SEM モデル）に基づいて、親密な友人関係、恋愛関係、知人との関係において、パートナーの自己評価維持への共感的反応が示されるかを検証している。その結果、親しい友人関係や恋愛関係では、自己関与度が低い遂行領域において、パートナーの自己評価維持への共感的な反応を示唆する反応傾向がみられるが、自己関与度が高い遂行領域では、自身の自己評価維持を志向した反応傾向がみられること、知人との関係では、自己関与度にかかわらず、拡張 SEM モデルから予測される感情反応パターンがみられることなどを明らかにしている。髙坂（2010b）は、同性友人、異性友人、恋人に対する期待の差異を検討している。その結果、男女ともに「信頼・支援」、「他者配慮」は恋人に対する期待が同性友人や異性友人に対する期待よりも高く、「積極的交流」は三者いずれにも同程度に期待されていることが示されている。一方、「外見的魅力」について、男性は恋人、異性友人、同性友人の順に期待しているのに対し、女性は恋人に対して高い期待をおいていることや、「相互向上」について、三者いずれに対しても、女性の方が男性よりも期待していることなどが明らかにされている。浅野・吉田（2011）は、恋愛関係にある大学生のカップルデータと同性友人関係のペアデータを用いて、関係効力性が安全な避難所機能と安全基地機能という 2 つの愛着機能に及ぼす影響について検討している。マルチレベル構造方程式モデリングを用いて分析を行ったところ、between モデルの結果から、恋愛関係では関係効力性が 2 つの愛着機能を促進するが、友人関係では安全な避難所機能のみ促進することが明らかにされている。

他の対人関係が恋愛関係に及ぼす影響を検討しているものとして、山内・伊藤（2008）

は、両親の夫婦関係が直接的に、あるいは青年自身の恋愛関係を媒介として、青年の結婚観に及ぼす影響について検討している。夫婦関係の評価が高い群では、夫婦関係の直接的な影響に加え、青年自身の恋愛関係を媒介として青年の結婚観に影響する「モデリングルート」が確認されたが、夫婦関係の評価が低い群では、直接的影響はみられるが、「モデリングルート」はみられないことが明らかにされている。

⑤その他　ここには、恋愛関係における感情生起に関する研究１本と、恋人を欲しいと思わない青年に関する研究２本が分類された。

榊原（2012）は、恋愛関係における怒りに関連する認知要因について検討するため、15の恋愛関係怒り喚起シナリオを作成し、そのシナリオの出来事が自分に起こったと想像したときにどの程度怒りが生じるかを調査している。その結果、恋愛関係においても被害と責任性の認知が怒り感情の強度に影響するが、怒り感情の強度は男女でほとんど違いはみられないことが示されている。

髙坂（2011）は、恋人を欲しいと思わない青年（恋愛不要群）の心理的特徴について、自我発達、精神的健康、自己観の観点から、恋人がいる青年（恋愛群）や恋人がいなくて欲しいと思っている青年（恋愛希求群）との比較を通して検討している。その結果、大学生では恋愛不要群が約20%いることや、恋愛不要群は自我発達が低く、無気力で、独断性が強いなどという特徴を明らかにしている。また、髙坂（2013b）は、恋人を欲しいと思わない青年を、恋人を欲しいと思わない理由をもとに５群に分類し、自我発達について比較を行っている。その結果、楽観的恋愛予期という理由を主とする楽観予期群や過去の恋愛のひきずりを主な理由とするひきずり群は自我発達の程度が高く、恋愛に対する自信のなさを主な理由とする自信なし群やほとんどの理由で高い得点を示す恋愛拒否群は自我発達の程度が低いことを明らかにしている。

４――考察

恋愛研究の4つの方向に関する現状と展開

本研究では、2004年４月から2013年３月の間に刊行された学会誌に掲載された恋愛関係に関する論文について、立脇ら（2005）が示した恋愛研究の４つの方向に基づいて分類を行った。その結果、一部重複すると考えられるものはあるものの、おおむね４つの方向に分類された。

しかし、４つの方向における研究の蓄積は同程度であるとは言えず、①特定の内容に関して詳細に検討する方向（内容の細分化）や④他の人間関係の中に位置づける方向（恋愛関係の相対的理解）に論文が集中していた。①特定の内容に関して詳細に検討する方向（内容の細分化）では、愛着スタイルを除くと、恋愛関係の影響、自己呈示動機、関係の安定性や良好性など、比較的新しいテーマやキーワードがみられた。恋愛に関する包括的･全体的

な研究がある程度行われたため、新しいテーマや切り口で、恋愛関係をより詳細に検討していこうという方向性が確認されたと考えられる。一方、新しいテーマであるため、研究の知見が少なく、恋愛関係を理解するうえで、これらが重要なテーマと位置づけられるのかは定かではなく、今後の研究の進展を期待したい。

④他の人間関係の中に位置づける方向（恋愛関係の相対的理解）では、金政（2009, 2012）や下田（2009）のように理論的背景のもと、合理的で必要に応じた比較対象が選択されているものもあるが、特段理由もなく「片思い」や「異性友人関係」を比較対象としている研究もみられた。恋愛関係の特徴を明らかにするうえで、他の対人関係との比較検討は必要であるが、比較対象がなぜ選ばれたのか、比較対象についてはどのような知見が蓄積されているのかなどが明示されていなければ、そこから得られた結果を解釈することは困難であると考えられる。言い換えれば、髙坂（2011, 2013b）の恋人を欲しいと思わない青年に関する研究にも言えることであるが、「片思い」や「恋人がいないので欲しいと思っている」など、交際には至っていないが、恋人を欲しいと思っている、特定の異性に思いを寄せているものに焦点をあてた研究はみられず、どのようにしたらこのような者たちに恋人ができるのかは十分に検討できているとは言えないのである。つまり、恋愛研究の対象者の中には、恋人がいる者もいればいない者もおり、恋人を欲しいと思っていたり片思いをしていたりする者がいれば、恋人を欲しいと思っていない者もいる。これらについてそれぞれどのような知見が蓄積されているのかを、まとめていくなかで、それぞれの特徴や比較対象として選定することの妥当性・合理性が明確になると考えられる。

一方、②恋愛の前後の現象を扱う方向（対象の時間的拡大）や③恋愛の負の側面を扱う方向（恋愛の捉え方の多様化）に関する研究は少なかった。②恋愛の前後の現象を扱う方向のなかでは、恋愛関係崩壊・失恋に関する研究が多かった。恋愛関係崩壊や失恋はストレスフルな現象・状態であり、それに対する対処やサポートという支援的な知見が求められているためであると考えられる。また、山下・坂田（2008）によって恋愛関係崩壊からの 4 段階の立ち直り過程が示されたことにより、今後は各段階における対処やサポートに関する研究が展開されると考えられる。対して、恋愛関係構築前の現象については、1 本しかみられなかった。立脇・松井（2014）は、2000 年代に入り、告白の研究が盛んになったと述べているが、学会誌論文レベルでみると、盛んになっているとは言えないことが明らかになった。告白は、日本や中国、韓国など一部の国・地域で行われている恋愛行動であり、世界的に見ると極めて珍しい行動である（牛窪, 2015）。そのため、告白については、海外での研究はほとんど行われておらず、海外の知見を参照することができない。このような現象・行動であるからこそ、実態調査などから知見をつみあげ、成果がまとまったところで、理論構築をしていくことが求められる。

③恋愛の負の側面を扱う方向に関する研究も 2 本と少なかった。立脇・松井（2014）は恋愛研究のレビューを行う際に、デート DV に関する研究は数が膨大であったため除外しているが、学会誌論文に限ると 1 本もみられなかった。デート DV やストーカーなど恋愛に

関連して生じる問題行動･犯罪行動に関する知見は、社会的意義がある一方、一定数の調査対象者を集めることが困難であり、また、特に被害者を対象とすることで、被害者に二次被害を生じさせる可能性もある。そのため、調査実施には十分な倫理的配慮が求められるものの、社会的なニーズも高まっているため、さらなる研究の発展が期待される。

恋愛研究全体に対する課題と期待

最後に、恋愛研究全体における課題と期待を 3 点あげる。

1 点目は調査対象者と調査方法についてである。立脇ら（2005）は、恋愛研究は大学生を対象とした質問紙調査に偏っていることを指摘しているが、今回のレビューにおいても同様の傾向が確認された。しかし、そのなかでもカップルデータを用いた研究やパネル調査（縦断調査）を行っている研究が増えており、それらのデータを分析する統計手法も開発されてきたことにより、これまででは明らかにされてこなかった（明らかにすることができなかった）結果が示されている。今後もカップルデータやパネル調査のような調査手法における工夫が行われるとともに、中学生や高校生、あるいは社会人など広い年齢層に対する研究が活性化することが期待される。

2 点目は、さらなる日本における研究の蓄積である。立脇・松井（2014）も恋愛研究では、欧米の知見を日本で確認するにとどまっている研究が少なくないことを指摘している。しかし、たとえば、愛情の三角理論（Sternberg, 1986）では、愛情は「親密性」、「情熱」、「コミットメント」という 3 つの要素で説明しているが、このうち「親密性」と「コミットメント」は日本における愛に関連するが、「情熱」は恋に関連し、必ずしも「情熱」が高いことが、親密な関係（あるいは成熟した関係）を意味するわけではないことが示されている（髙坂, 2015）。また、先ほど指摘したように、告白などは欧米ではほとんど行われておらず、性行動に関する規範なども欧米と日本では異なる可能性がある。そのようななかで欧米の理論や知見を無批判に適用させようとすることは、かえって日本における恋愛関係を捉えにくくする懸念もある。日本における恋愛の現象･行動について丁寧に、また継続的に検討し、ボトムアップ的に理論を構築していくことにより、海外の恋愛との差異もより明確になるといえる。

3 点目は、恋人の定義という、より根本的な問題である。本研究でレビューした論文のうち、恋人を明確に定義していたものは、髙坂（2011, 2013b）の 2 本だけであった。ちなみに、髙坂（2013b）は恋人を、“回答者が恋人であると思う実際に存在し、接触・交流できる異性”とし、片思いや同性の恋人、芸能人･有名人、アニメやゲームのキャラクターなどは、“恋人”の範囲には含めなかったとしている。このように恋人の定義を明確にしていなくとも、ほぼすべての恋愛研究では、恋愛関係は異性関係であることを前提としている。しかし電通（2015）は、LGBT に相当する者の割合が 7.6%であることを明らかにしている。また、いわゆるセックス･フレンドのように、恋愛関係を構築していなくとも、性行動を含めた親密な恋愛行動に相当する行動をしている者の存在も指摘されている。つまり、

恋愛や性に関わる社会的状況や世間一般の捉え方、あるいは規範が時代的に変化しており、恋人とはどのような存在であるかを明示することなく調査･研究することが困難になってきたと考えられる。今後、恋愛に関する研究をする際には、研究の立場や研究で捉えようとする範囲を明らかにするうえでも、恋人を明確に定義することが求められる。

《引用文献》

相羽美幸（2011）．大学生の恋愛における問題状況の特徴　青年心理学研究, **23**, 19-35.

浅野良輔（2011a）．恋愛関係における関係効力性が感情体験に及ぼす影響：二者の間主観的な効力期待の導入　社会心理学研究, **27**, 41-46.

浅野良輔（2011b）．恋愛関係における健康生成モデルの個人内･個人間過程―カップルデータを用いた検討―　実験社会心理学研究, **50**, 158-167.

浅野良輔･堀毛裕子･大坊郁夫（2010）．人は失恋によって成長するのか―コーピングと心理的離脱が首尾一貫感覚に及ぼす影響　パーソナリティ研究, **18**, 129-139.

浅野良輔・吉田俊和（2011）．関係効力性が二つの愛着機能に及ぼす影響―恋愛関係と友人関係の検討―　心理学研究, **82**, 175-182.

電通（2015）．電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT 調査 2015」を実施
http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html（2015 年 11 月 8 日）

深澤真紀（2007）．平成男子図鑑　日経 BP

金政祐司（2006）．恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について　社会心理学研究, **22**, 139-154.

金政祐司（2009）．青年期の母―子ども関係と恋愛関係の共通性の検討：青年期の二つの愛着関係における悲しき予言の自己成就　社会心理学研究, **25**, 11-25.

金政祐司（2012）．相互支援が関係満足度ならびに精神的健康に及ぼす影響についての青年期の恋愛関係と中年期の夫婦関係の共通性と差異　発達心理学研究, **23**, 298-309.

金政祐司・大坊郁夫（2001）．愛情の三角理論における 3 つの要素と親密な異性関係　感情心理学研究, **10**, 11-24.

加藤　司（2005）．失恋ストレスコーピングと精神的健康との関連性の検証　社会心理学研究, **20**, 171-180.

髙坂康雅（2009）．恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連　パーソナリティ研究, **17**, 144-156.

髙坂康雅（2010a）．大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連　発達心理学研究, **21**, 182-191.

髙坂康雅（2010b）．大学生における同性友人、異性友人、恋人に対する期待の比較　パーソナリティ研究, **18**, 140-151.

髙坂康雅（2011）．“恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討　青年心理学研究, **23**, 147-158.

髙坂康雅（2013a）．大学生におけるアイデンティティと恋愛関係との因果関係の推定：恋人のいる大学生に対する 3 波パネル調査　発達心理学研究, **24**, 33-41.

髙坂康雅（2013b）．青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達との関連　発達心理学研究, **24**, 284-294.

髙坂康雅（2015）．青年期における恋愛様相モデルと愛情の三角理論との関連　日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会発表論文集.

松井　豊（1990）．青年の恋愛行動の構造　心理学評論, **33**, 355-370.

松本　文（2007）．青年期後期の自己愛傾向と対人態度の関連　友人・恋人・親に対する肯定的態度に関して　心理臨床学研究, **25**, 186-196.

宮村季浩（2005）．大学生における恋愛関係の解消とストーカーによる被害の関係　学生相談研究, **26**, 115-124.

日本性教育協会（編）（2013）.「若者の性」白書　第 7 回青少年の性行動全国調査報告　小学館

岡島泰三（2010）．青年期におけるアタッチメントスタイルの変化と恋人の応答性　青年心理学研究, **22**, 33-44.

阪井俊文（2007）．セクシズムと恋愛特性の関連性の検討　心理学研究, **78**, 390-397.

榊原佐和子（2012）．恋愛関係シナリオを読んだときに生じた認知と喚起された怒り強度との関連　応用心理学研究, **38**, 153-154.

清水裕士・大坊郁夫（2007）．恋愛関係の相互作用構造と関係安定性の関連：カップルデータへのペアワイズ相関分析の適用　社会心理学研究, **22**, 295-304.

清水裕士・大坊郁夫（2008）．恋愛関係における相互作用構造の研究―階層的データ解析による間主観性の分析―　心理学研究, **78**, 575-582.

下田俊介（2009）．親密な友人関係における自己評価維持と関係性維持：拡張自己評価維持モデルからの検証　社会心理学研究, **25**, 70-76.

相馬敏彦・浦　光博（2007）．恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか―サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼感の影響―　実験社会心理学研究, **46**, 13-25.

Sternberg, R. J.（1986）．A triangular theory of love. *Psychological review*, **93**, 119-135.

多川則子・吉田俊和（2006）．日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響　社会心理学研究, **22**, 126-138.

谷口淳一・大坊郁夫（2005）．異性との親密な関係における自己呈示動機の検討　実験社会心理学研究, **45**, 13-24.

谷口淳一・大坊郁夫（2008）．恋人関係における自己呈示は自己確証的か自己高揚的か　社会心理学研究, **24**, 11-22.

立脇洋介（2005）．異性交際中の出来事によって生じる否定的感情　社会心理学研究, **21**, 21-31.

立脇洋介（2007）．異性交際中の感情と相手との関係性　心理学研究, **78**, 244-251.

立脇洋介・松井　豊（2014）．恋愛　平木典子・稲垣佳世子・河合優年・斉藤こずゑ・高橋惠子・山　祐嗣（編）児童心理学の進歩　2014 年版　53 巻, 金子書房, pp.95-119.

立脇洋介・松井　豊・比嘉さやか（2005）．日本における恋愛研究の動向　筑波大学心理学研究, **29**, 71-87.

牛窪　恵（2015）．恋愛しない若者たち　ディスカヴァー・トゥエンティワン

山下倫実・坂田桐子（2008）．大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連　教育心理学研究, **56**, 57-71.

山内星子・伊藤大幸（2008）．両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響：青年自身の恋愛関係を媒介として　発達心理学研究, **19**, 294-304.

付記：本研究において、学会誌における対象論文の検索・収集は，以下の和光大学 2014 年度「青年心理学演習」3 年次受講生 9 名が行ったものである。

川上真緒・岸川知正・小林　萌・田井愛美・成田莉菜・野口欣洋・宮下　葵・山川茉美・和地彩香（50 音順）

［こうさか　やすまさ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授］